

リーディングDXスクール事業【実践事例】

京都市立南大内小学校（京都府）

【取組内容】①個別最適な学びと協働的な学びの一体化を意識した授業構成

- 個別最適な学びの充実のために学習方法を児童自身が選択する場面をもつように取り組んだ。
- 本年度は高学年だけではなく低学年でも実践する場面が増えてきた。
- 学び方を児童が選択する学習には、GIGA端末が大きな役割を果たしている。

「おひとりさまコース」「友だちコース」「先生コース」に分かれての学び

【おひとりさまコース】

学習問題や問いに対して、一人で取り組むコース。自分のペースで学習に取り組むことができるためか、集中力が一斉指導よりも増しているように感じる。



【友だちコース】

学習問題や問いに対して、友だちと考えや意見を出し合いながら取り組むコース。学習問題に応じて、教科書に掲載されているQRコードを活用する場合もある。また、友だちと話し合うことで、伝える力がアップする効果も期待できる。



【先生コース】

学習問題や問いに対して、授業者と一緒に取り組むコース。端末や黒板を使用して、指導者と児童が近い距離で学習することができる。一斉指導よりも人数が少ないため、児童の表情や反応を指導者が受け取りやすい。



＜工夫点や変容＞

- 児童が自身で学び方を選択するため、学習により意欲的な姿が見られ、最後まで粘り強く学習問題に取り組むことが多くなった。
- 「先生コース」を選択する児童は算数科に対して苦手意識がある児童が多い。そのため、授業者が細かい部分まで児童の様子を見たり、学習内容を理解しているかを把握したりして学習を進めることができることは児童が安心して学習に向かうことにつながっている。
- 選択したコースを途中で変更し、新たなコースで頑張ることを認めるようにしている。